

文型再考

藤 本 滋 之

西南学院大学学術研究所
英語英文学論集
第59巻第3号抜刷
2019（平成31）年2月

文 型 再 考

藤 本 滋 之

0. はじめに

日本の学校英文法で長く採用されて来たものに5文型がある。これは Cooper and Sonnenschein (1889) と Onions (1904) の「述部の5形式」(five forms of the predicate) に基づいて細江 (1917) が提唱した五つの「文の成立の根本形式」を起源とする (宮脇 2012)。しかしながら、百年の歴史を持つ5文型システムの最大の問題は、必須の副詞を伴う文を収容できないことであり、Quirk *et al.* (1985: 53) は文型を clause type と呼び、5文型に次の二つを加えた7文型システムを提案している。

- (1) S+V+A の clause type
 - a. I have been *in the garden*.
 - b. He stayed *in bed*.
 - c. The road is *under construction*.
 - d. He is *without a job*.
 - e. My sister lives *next door*.
- (2) S+V+O+A の clause type
 - a. You must put all the toys *upstairs*.
 - b. They kept him *in bed*.
 - c. We kept him *off cigarettes*.
 - d. They treated her *kindly*.
 - e. The doorman showed the guests *into the drawing room*.

(Quirk *et al.* 1985: 53-56)

必須の副詞を考慮に入れた文型システムは、綿貫他（2000）や安藤（2005）でも採用されている。綿貫他（2000）は、基本5文型に「付加語」と呼ぶ義務的な副詞を伴う特別な文型を加えた5 + 3文型システムを採用している。他方、安藤（2005）は「義務的な副詞語句」を伴う文型を綿貫他（2000）のように特別扱いせず、8文型のシステムを採用している。八つの文型の内容は双方に共通していて次のようになる。(3a)～(3h)の各i)は綿貫他（2000: 35-44）、ii)は安藤（2005: 16）からの引用である。

- (3) a. S+V
- i) Years passed.
 - ii) The sun rose.
- b. S+V+A
- i) Mother is in the kitchen.
 - ii) Mary is here.
- c. S+V+C
- i) We are getting older day by day.
 - ii) John is a teacher.
- d. S+V+C+A
- i) He is very fond of playing the guitar.
 - ii) John is very fond of cats.
- e. S+V+O
- i) Have some more apple pie.
 - ii) I like apples.
- f. S+V+O+A
- i) He put the key in the lock.
 - ii) Father took me to the zoo.
- g. S+V+O+O
- i) I gave him some advice.
 - ii) Bill gave Sally a book.

h. S+V+O+C

- i) No wise bird makes its own nest dirty.
- ii) They named the baby Kate.

上記八つの文型のうち、Quirk *et al.* (1985) にないのは(3d)「S+V+C+A」の文型であるが、これは他の七つの文型とは「異質」である。最後のAはCが求める必須の要素でありVが必要とするものではないからである。したがって、本稿ではQuirk *et al.* (1985) における7文型を、英語学習に適切なシステムとして採用することにする。

本稿では、文を構成する要素の範疇 (category) や機能 (function) だけでなく、主題役 (thematic roles) によって表される文の意味を考慮に入れて文型 (構文) を考えることの意義を論じる。結論として、必須の副詞Aを伴う5文型システムにはない文型こそが中心的位置を占めることを明らかにする。

1節では、主題役の組合せによって生じ得る構文 (文型) のパタン八つを確認する。2節では三つの主題役が全部揃ったSVOA、SVOO、SVOC三つの構文を考察し、それらが表す基本的意味が「位置変化 (移動) 使役」と「状態変化使役」であることを論じた後、その二つの意味の交替の可否を3節で考察する。4節で二つの主題役を持つ構文三つを分析し、5節で、文型の基本と考えて来た人が多いと思われるSVOの文型が、実は特殊な構文であることを論じる。最後に6節で、一つの主題役だけから成る構文三つと主題役が一つもない構文を考察し、7節で本稿の目標が達成されたことを確認して結びとする。

1. 主題役の組合せと可能な構文

文の意味を一般化、抽象化し、統語構造と意味の関係を論じる手段として「主題役」(thematic roles) がある。Gruber (1965) や Jackendoff (1972) による提案以来、研究者によって様々な主題役が提案されてきたが、文の構造との関係を考慮する際に意味を持つのは、加賀 (2001) と Kaga (2007) で用いられている「マクロな意味役割 (semantic macroroles)」(cf. van Valin 1990) であり、《動作主 (Agent)》、《場所 (Location)》、《存在物 (Locatum)》の三つに

限定される。《動作主》には従来の〈動作主 (Agent)〉と〈原因 (Cause)〉が含まれ、二つ目の《場所》には従来の〈場所 (Location)〉のほか〈着点 (Goal)〉、〈起点 (Source)〉、〈経路 (Path)〉、〈受益者 (Benefactive)〉、〈経験者 (Experiencer)〉、〈被動作者 (Patient)〉が含まれる。三つ目の《存在物》は一般に〈主題 (Theme)〉と呼ばれることが多かった移動物、出現物、存在物に与えられる主題役である。

本節では、文の表す意味はすべて《動作主》、《場所》、《存在物》という三つのマクロな主題役の全部または一部の組合せによって表されると仮定し、その可能な組合せと構文の関係を考察する。構文の派生を考えるときには、当然のことながら語順が問題になる。各主題役が生じる順序は、Jackendoff (1972) や Grimshaw (1990) で提案され、加賀 (2001)、Kaga (2007) でも採用されている主題階層 (thematic hierarchy) 「動作主>場所>存在物」に従うと仮定する。そうすると、三つの主題役を全部含む文の基本語順は(4a)のようになる。これを本稿では(4b)のように表すことにする。

(4) a. 《動作主》+動詞+《場所》+《存在物》

b. A V L T (A: Agent, V: Verb, L: Location, T: Theme¹)

以下、すべての文が三つの主題役の組合せによって成り立つと仮定すると、考えられる文の基本語順は、上記(4b)を含め次のようになる。

(5) a. A V L T (三つの主題役から成る)

b. i) __ V L T → L V __ T (Agent がなく Location が主語位置に移動)

ii) __ V L T → T V L __ (Agent がなく Theme が主語位置に移動)

c. A V L __ (Theme がない)

d. A V __ T (Location がない)

¹ 《存在物 (Locatum)》を T と略称するのは、《場所》すなわち Location の L との重複を避けるためである。《存在物》は従来の「ミクロな」主題役〈Theme〉の概念に近い。

- e. A V _ _ (Agent だけから成る)
 f. _ V L _ → L V _ _ (Location だけから成り主語位置に移動)
 g. _ V _ T → T V _ _ (Theme だけから成り主語位置に移動)
 h. _ V _ _ (主題役が一つもない)

以下の各節では、(5)のそれぞれ構文を考察することにする。

2. 三つの主題役が揃った構文

本節では三つの主題役が全部揃った(5a)のタイプの文を考察する。これは、(6)のような場所格交替 (locative alternation) 構文 (あるいは壁塗り交替構文)、(7)のような与格交替 (dative alternation) 構文、(8)のような結果構文 (resultative construction) が該当する。

- (6) a. We loaded our baggage in(to) the car.
 b. We loaded the car with our baggage.
 (7) a. He sent her a telegram.
 b. He sent a telegram to her.
 (8) a. John painted the fence green.
 b. Joggers ran the pavement thin.

(6a)は、《動作主》である we が《存在物》である our baggage を《場所》である the car まで移動させたという「位置変化使役 (移動使役)」を表す。他方、(6b)は、《動作主》である we が《場所》である the car の状態を《存在物》である our baggage を用いて満載という状態に変化させたという「状態変化使役」を表す。与格交替の関係にある(7)は、a、b 共に a telegram という《存在物》を her という場所に he という《動作主》が移動させたことを表すので、(6a)と同じ「位置変化使役」である。² 他方、結果構文(8)はどちらも(6b)と同

² (7a)は《存在物》の《場所》への到達まで表すのに対し、(7b)は《場所》に向けて発

じ「状態変化使役」を表す。

ここで、場所格交替の関係にある(6a)と(6b)の文の派生を考えよう。主題階層「動作主>場所>存在物」を仮定すると、(6b)が基底語順通りの文である。他方、(6a)は次のような移動操作によって派生したと考えることができる。

- (9) a. We loaded in(to) the car our baggage.
 動作主 場所 存在物
- b. We loaded our baggage in(to) the car _____ .
 動作主 ↑ 場所 存在物
-

(9a)は主語名詞句 we が《動作主》、動詞 loaded に後続する前置詞句 in(to) the car が移動の到達点である《場所》、最後の名詞句 our baggage が移動する《存在物》である。名詞句は目的格を照合する必要があるため動詞に隣接する位置に移動し、(9b)の語順の文が派生する。³

次に、与格交替の関係にある(7a)と(7b)の文の派生を考えよう。主題階層「動作主>場所>存在物」と同じ語順は(7a)である。他方、(7b)は次のような移動操作によって派生したと考えることができる。

- (10) a. He sent to her a telegram.
 動作主 場所 存在物
- b. He sent a telegram to her _____ .
 動作主 ↑ 場所 存在物
-

送したことは表すが到達までは表さない (cf. Green 1974, Oehrle 1976, Pinker 1989, Gropen *et al.* 1989, Goldberg 1992, 岸本 2001)。

³ 目的格照合の仕組みについては Travis (2010) におけるような split VP の構造と Aspect phrase の存在を仮定しているが、ここでは立ち入らない (cf. 藤本 2015)。

文型は文 (sentence) を正しく書き話すために必要な文法の知識である。この目標を達成するのに、5 文型のシステムが見落とした SVOA の文型の重要性、これを SVOO や SVOC と関係づけることの意義、文型を意味と関連づけることの意義がすでに明らかになったかと思われる。

以下の節では、二つの主題役から成る文型についても、意味と一定の相関関係があることを考察するが、その前に、SVOA の文型で用いられる動詞の特徴を見ておきたい。

3. 位置変化と状態変化の交替

SVOA の文型で用いられる位置変化使役あるいは状態変化使役を表す動詞には二つのタイプがある。⁶ 位置変化使役と状態変化使役の交替つまり場所格交替 (壁塗り交替) が可能なタイプと、いずれか一方のみが可能なタイプである。前者の例として次のようなものがある。

- (13) a. i) John loaded hay in(to) the wagon.
 ii) John loaded the wagon with hay.
 b. i) She packed books in(to) the box.
 ii) She packed the box with books.
 c. i) He dusted a pesticide over the cornfield.
 ii) He dusted the cornfield with a pesticide.
 d. i) They hung a portrait on the wall.
 ii) They hung the wall with a portrait.

上記の例のそれぞれ i) の文は、目的語名詞句が表す物を前置詞句が表す場所へ移動させる位置変化使役の意味を表す。他方 ii) の文は、目的語名詞句が表す

⁶ SVOA の文型の例として Quirk *et al.* (1985)、綿貫他 (2000)、安藤 (2005) が挙げているのは、いずれも位置変化使役か状態変化使役である。次の文における副詞も必須の要素と言われるが、本稿ではこれを SVO の構文と考えたい。

i) They treated her kindly. (= (2d))

物の状態を、前置詞句補部が表す物を使って変化させる状態変化使役の意味を表す。

位置変化使役と状態変化使役の交替を許す動詞の中には、次のように「場所」が「到達点 (Goal)」ではなく「起点 (Source)」の場合もある。

- (14) a. i) We cleared snow off the pavement.
ii) We cleared the pavement of snow.
b. i) I emptied the water from the tub.
ii) I emptied the tub of the water.
c. i) He bled air out of the tire.
ii) He bled the tire of air.

(13)の例は、ある「存在物」をある「場所」まで移動させる場合であるが、(14)の例は、ある「存在物」をある「場所」から他の場所へ移動させる場合である。(13)と(14)で用いられている動詞は、i) のタイプの文におけるように「存在物」を移動させる意味を表すこともできれば、ii) のタイプの文におけるように「場所」の状態を変化させる意味を表すこともできる。

これに対し、位置変化使役の意味を表す文、つまり「存在物」を目的語とする文と、状態変化使役の意味を表す文、つまり「場所」を目的語とする文のいずれか一方だけ可能な動詞がある。

- (15) a. i) She poured water in(to) the bowl.
ii) *She poured the bowl with water.
b. i) He rolled his bike along the street.
ii) *He rolled the street with his bike.
(16) a. i) *June covered a blanket over the baby.
ii) June covered the baby with a blanket.
b. i) *Red lacquer is coated on the body.
ii) The body is coated with red lacquer.

(15)のタイプの動詞は、それぞれ i) の例のように《存在物》を目的語とする文だけ可能で、ii) のように《場所》を目的語とすることができない。他方、(16)のタイプの動詞は(15)とは逆に、《場所》を目的語とする文は可能だが《存在物》を目的語とすることはできない。

この非対称は《場所》が〈起点〉の場合についても言える。

- (17) a. i) The thief stole the paintings from the museum.
 ii) *The thief stole the museum of the paintings.
 b. i) Mr. Kim was abducted from Tokyo.
 ii) *Tokyo was abducted of Mr. Kim.
- (18) a. i) *They cheated money from John.
 ii) They cheated John of his money.
 b. i) *They deprived the little pleasure from me.
 ii) They deprived me of the little pleasure.
 c. i) *Her purse was robbed from her on the train.
 ii) She was robbed of her purse on the train.
 d. i) *The doctor cured pneumonia from the patient.
 ii) The doctor cured the patient of pneumonia.

(15)と(17)のタイプの動詞は《存在物》を移動させる意味を表すのに対し、《場所》の状態変化を表すことができない。他方、(16)と(18)のタイプの動詞は《場所》の状態変化を表すことができるが、《存在物》を移動させる意味は表せない。これに対し、(13)と(14)のタイプの動詞は《存在物》の位置変化使役と《場所》の状態変化使役の両方を表すことができるために、いわゆる「場所格交替（壁塗り交替）」が可能なのである。

場所格交替、つまり位置変化使役と状態変化使役の交替を許す動詞でも、前置詞句の省略可能性について動詞によって違いがある。

- (19) a. He piled the books.
b. He piled the books on the shelf.
c. *He piled the shelf.
d. He piled the shelf with books.
- (20) a. *He stuffed the breadcrumbs.
b. He stuffed the breadcrums into the turkey.
c. He stuffed the turkey.
d. He stuffed the turkey with the breadcrumbs.

(Pinker 1989: 125、高見・久野 2014: 153)

(19)の動詞 pile の場合、(19a)のように場所の指定がない、あるいは場所を指定しなくても成り立つ。(19a)は表面的にはSVOの文型であるが、《場所》がなくても位置変化使役の意味を表すことに変わりなく、SVOAの文(19b)の特別な場合と考えることができる。他方、(20)の動詞 stuff の場合、(20c)のように《存在物》がなくても成り立つ。(20c)も表面的にはSVOの文型であるが、《存在物》がなくても状態変化使役の意味を表すことに変わりなく、SVOAの文(20d)の特別な場合と考えることができる。

「位置変化使役」と「状態変化使役」の交替は、それぞれ《動作主》がなく「使役」が外れた「位置変化」と「状態変化」の間でも起こる。次の例が該当する。

- (21) a. We turned to the right there.
b. His face turned red.
- (22) a. They got to the station by taxi in ten minutes.
b. They got excited to hear the news.

すでに結果構文(8)の主題役分析(11)で見たように、状態変化使役文において変化する状態は《存在物》を、状態が変化するものは《場所》を担う。この分析を位置変化文と状態変化文にも適用すると、たとえば(21)の主題構造は次のよ

「位置変化文」と「状態変化文」の文型を確認すると、前者はSVA、後者はSVCとなることが多い。《場所》は前置詞句、《存在物》としての状態は形容詞句として具現化することが多いからである。⁸ここでも「位置変化使役文」(多くはSVOA)対「状態変化使役文」(多くはSVOC)の場合と同様、AとCとの違いは範疇の違いに過ぎないものである。このような、文型という表面的な違いよりも、位置変化と状態変化という意味の交替のほうが、文の構造を考える上でははるかに意義深い。

位置変化使役文には、SVOAのほかSVOOもある。これに対応する位置変化文を見ておこう。SVOOの文(24)(=7a)に対応する位置変化文は(25)である。

(24) He sent her a telegram.

動作主 場所 存在物

(25) She got _____ a telegram.

↑
場所 存在物


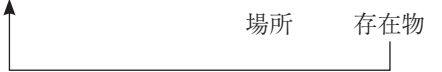
位置変化使役文(24)における使役者である《動作主》が、位置変化文(25)には存在しない。そのため空の主語位置に《場所》を担う名詞句が移動して派生したのが位置変化文(25)と考えられる。この場合も、位置変化使役文において目的語位置にあった《場所》項が、位置変化文では主語位置に生じている。もう一つの《存在物》項も名詞句なので、結果としてSVO構文となる。

結論として、「位置変化使役文」と「状態変化使役文」という、目的語が《存在物》か《場所》かという交替関係にある文の具現形であるSVOA、SVOC、SVOOの三つの文型に対応して、位置変化文と状態変化文も、主語が《存在物》か《場所》かという交替関係にあり、その具現形にも、SVA、SVC、SVOの三つの文型が存在することが確認された。

⁸ 特定の主題役(意味役割)は特定の範疇(category)の句が担うのが一般的である。言語のこの現象をChomsky(1986)はCSR(Canonical Structure Realization)と呼ぶ。ここでいう「具現化」はこれを意図したものである。

4. 二つの主題役から成る構文

本節では、二つの主題役を有する (5b-d) のタイプの文を考察する。(5b) は《動作主》がなく《場所》と《存在物》の二つの主題役から成る。非対格動詞の文がこれに属する。《動作主》がない「空席」の主語位置に《場所》が繰り上がると (5b) の i) のタイプが派生し、《存在物》が繰り上がると ii) のタイプの文が派生する。次の例のように、自動詞の場所格交替が典型例である。

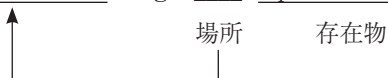
- (26) a. The garden is swarming ____ with bees.

場所 存在物
- b. Bees are swarming in the garden ____ .

場所 存在物

(26)の空欄 ____ は、いずれも主語名詞句がはじめに併合 (Merge) した位置を示している。(26a)では、《動作主》がなく空席だった主語位置に《場所》を担う名詞句 the garden が移動する。他方、(26b)では主語位置に《存在物》を担う名詞句 bees が移動する。文型はSVAで、(26a)は場所の状態変化、(26b)は存在物の位置変化(移動)を表す。

《場所》と《存在物》の二つの主題役から成る文には、次のような場所格倒置 (locative inversion) 構文や提示の there (presentational *there*) 構文もある。⁹ これも文型はSVAか、その変異形AVSあるいはVASであり、ある《場所》に《存在物》が存在することを表す。

⁹ 「提示の there 構文」の概念は、Milsark (1974) が^s outside verbal existential sentence と呼び、Aissen (1975) や Coopmans (1989) が^s presentational *there*-construction、Rochemont and Culicover (1990) が^s presentational *there* insertion と呼んだものに当たる。

(27) a. On the office wall hangs ____ a picture of Sapir.



b. A picture of Sapir hangs on the office wall ____.



(28) There hangs on the office wall a picture of Sapir.

場所 存在物

場所格倒置構文(27a)では、《場所》を担う前置詞句 *on the office wall* が動詞に後続する基底位置から空席の主語位置へ移動している。他方、倒置のない(27b)では、《存在物》を担う名詞句 *a picture of Sapir* が文末の基底位置から主語位置へ移動している。これに対し、(28)のような提示の *there* 構文では、《場所》を担う前置詞句も《存在物》を担う名詞句も、はじめに併合した位置に留まり、空席の主語位置には虚辞の *there* が挿入される。つまり(28)は、文の基底の構造が主題階層を反映するものであることを示唆しているのである。

(28)のような存在を表す *there* 構文は、主題階層通りに《場所》が《存在物》に先行する語順だけでなく、《存在物》が《場所》に先行する語順も可能である。

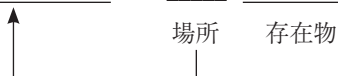
(29) a. *There* hangs on the office wall a picture of Sapir.

b. *There* hangs a picture of Sapir on the office wall.

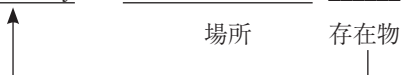
(Aissen 1975: 1-2)

他方、場所格倒置構文や *there* 構文には(30)～(33)のような「出現」を表す場合がある。《場所》を担う前置詞句が《存在物》を担う名詞句に先行する語順だけが容認され、逆の語順は容認されない。

(30) a. Onto the sidewalk fell _____ a little boy.



b. A little boy fell onto the sidewalk _____.



(31) a. There walked into the bedroom a unicorn.

b. *There walked a unicorn into the bedroom.

(Milsark 1974: 246, 250)

(32) a. There ran out of the bushes a grizzly bear.

b. ??There ran a grizzly bear out of the bushes.

(Aissen 1975: 1-2)

(33) a. There flew into the air the dog and the frog.

b. *There flew the dog and the frog into the air.

(藤本 2009: 86)

(30a)の場所格倒置構文は、存在を表す(27a)と同様、《場所》を担う前置詞句が、《動作主》がないため空席の主語位置に移動して派生する。代わりに《存在物》を担う名詞句が主語位置に移動すると(30b)が派生する。一方、出現を表す there 構文は、藤本(2015)で論じたように、存在を表す there 構文と異なり、名詞句が動詞句内で移動して前置詞句の前に繰り上がるプロセスがない。そのため、主題階層を反映する基底の語順だけが容認されることになる。

ここで、二つの主題役、《場所》と《存在物》から成る文が表す「位置変化(移動)」(26の場合)、「存在」(27)と(28の場合)、「出現」(30)~(33の場合)の意味と、2節で見た三つの主題役からなる文の意味—「位置変化使役」と「状態変化使役」—との関係を確認しておきたい。(26)は位置変化(移動)と状態変化を表す。つまり三つの主題役をもつ文から《動作主》が無くなり「使役」の意味が無くなったものと言える。(27), (28)のような「存在」は位置が変化しない「位置変化」の特別な場合と言える。他方「出現」も、存在する位置を

持たなかったものが位置を持つようになる「位置変化」の特別な場合であると言える。

次に、二つの主題役から成る文の二つ目のタイプ(5c)、つまり<動作主>と<場所>からなる場合を考えたい。このタイプは、例(34)が示すように、<動作主>の意図的な行為と、それに伴う<動作主>自身の<場所>への移動が典型例である。

- (34) a. Mary danced into the room.
動作主 + 存在物 (移動物) 場所
- b. The horse jumped over the fence.
動作主 + 存在物 (移動物) 場所

上記において、<動作主>は移動物でもあるから<存在物>を兼ねていることになる。つまり(5c)は、<動作主>が<存在物>を兼ねる特別な場合と言える。¹⁰これも文型はSVAであり、上記の文の第一義は「位置変化(移動)」である。danceやjumpといった動詞が本来持つと考えられている「踊る」や「跳ぶ」と言った行為の意味は、この構文の中では移動の様態を表すのに寄与するという二義的なものになっている。

(5c)には、次の例のように名詞由来の動詞を用いる構文がある (cf. Jackendoff 1990、影山・由本 1997)。

- (35) a. John buttered bread.
動作主 存在物 場所
- b. Mary painted the gate.
動作主 存在物 場所

¹⁰ 本稿では、文法項(argument)が担う主題役を一つに限るといような Theta Criterion (cf. Chomsky 1981, 1983) の考え方を採用しない。

このタイプの文は、動詞が〈存在物〉を含むことを特徴とする。このタイプの文型はSVOである。〈動作主〉が、動詞が示唆する〈存在物〉を、目的語が表す〈場所〉へ移動させ〈場所〉の状態を変化させた（バターやペンキが塗られた状態に変えた）という「状態変化使役」を表す。この意味を表す基本文型SVOAの中で、独立した〈存在者〉を担うAがない特別な場合と言える。

最後に、(5d)のタイプ、つまり〈動作主〉と〈存在物〉から成る文を考察する。〈動作主〉の意図的な行為によって〈存在物〉が生じたり消えたりする場合が典型例である。

- (36) a. The dog barked a warning.
 動作主+場所 存在物
- b. He swallowed a shot of whisky.
 動作主+場所 存在物

このとき、〈場所〉は〈動作主〉が兼ねていることになる。上記の例のように発声や飲食を表す状況では、〈存在物〉である声や飲食物が出入りする〈場所〉は口であり、〈動作主〉の体の一部であるから、〈場所〉と〈動作主〉が同じということになる。したがって(5d)は、「位置変化使役」を表すSVOA構文においてAがない特別な場合と言える。

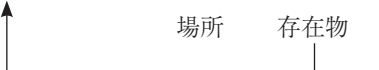
(5d)にも、動詞が主題役を含むような場合がある。次の文では動詞が〈場所〉を兼ねていると言える (cf. Jackendoff 1990)。

- (37) a. They jailed John.
 動作主 場所 存在物
- b. She caged the bird.
 動作主 場所 存在物

このタイプの文は「位置変化使役」を表すSVOA構文において、VがAを兼ねるためSVOになった特別な場合と言える。

上記の例は、主語名詞句が《場所》、目的語名詞句が《存在物》を担う位置変化文と分析できる。(38a)では手紙という物理的な存在物が Mary まで移動し、(38b)では絵の視覚情報が John に到達する。(38c)では政府による迫害という心理に作用する情報が Bill に到達し、(38d)では French の情報という抽象的な存在物が Rhoda のところまで移動する。《場所》と《存在物》という本来は内項が担うはずのものが双方とも名詞句として具現化するのは特殊な文と言える。それは SVOO の文が特殊と言えるのと同じである。¹²

逆に、《存在物》が主語位置に生起する場合もある。

(39) They all entered the room _____ .


(39)は主語《存在物》の目的語《場所》への移動を表すが、主語《存在物》の位置変化を表す文は、《場所》は名詞句でなく前置詞句として具現化するのが普通であり、(39)のような SVO 構文は稀である。

次に、《動作主》を主語とする SVO の文型を見よう。

(20c) He stuffed the turkey.
 動作主 存在物 場所
 cf. He stuffed the turkey with the breadcrumbs. (= (20d))
 動作主 場所 存在物

(20c)は、位置変化使役文(20d)において《存在物》の指定がなくなった特別な文としてとらえた。それを可能にしているのは、動詞 stuff だけで目的語名詞句

¹² 事実、位置変化文(38)は c を除いて対応する位置変化使役文すなわち SVOO 型の文を考えることができる。

i) He sent Mary a letter.
 ii) She showed John some pictures in her studio.
 iii) Someone taught Rhoda French.

の表す場所の状態変化を表すことができるためと思われる。つまり、動詞が変化した状態としての《存在物》を担うことができるためと言える。いずれにせよ、ここでも SVO の文型は SVOA の文型の特別な場合と言える。

同様の主題構造は、すでに見た次の文にも成り立つ。

- (35) a. John buttered bread.
動作主 存在物 場所
- b. Mary painted the gate.
動作主 存在物 場所

(35)は、動詞が変化した状態としての《存在物》を示唆し、状態変化が生じる《場所》を担う唯一の内項が目的語位置にある特別な状態変化使役文としてとらえた。同じパタンの文として次のような例も考えられる。

- (40) The news frightened them.
動作主 存在物 場所

(40)は(38c)と同じ心理動詞を使った文であるが、状態変化使役文の特別な場合として考えることができる。さらに次の例も同じパタンの文と言える。

- (41) Care killed the cat.
動作主 存在物 場所

(41)は、結果述語がなくても動詞だけで変化した結果の状態を表すことができる。変化した状態は《存在物》であるから、(20c)、(35)、(40)と同様に動詞が《存在物》を担う、特別な状態変化使役の文であると言える。

《動作主》と《場所》から成る SVO 型の文には、次のようなものもある。

- (42) a. He pushed me.
 b. Carrie touched the cat.
 c. The inspector analyzed the building.
 d. They praised the volunteers.

(42)は、主語が担う《動作主》が、何らかの影響力、作用を目的語が担う《場所》に及ぼすことを表している。これらの文はいずれも次のように書き換えることができる。

- (43) a. He gave { me a push / a push to me }.
 b. Carrie gave { the cat a touch / a touch to the cat }.
 c. The inspector gave an analysis of the building.
 d. They gave { the volunteers praise / praise to the volunteers }.

この書き換えは、(42)が位置変化使役を表すことを示唆しており、位置が変化する《存在物》は動詞に含まれると言える。したがって、(42)も位置変化使役文の特別な場合であると言える。

他方、主語が《動作主》の時に目的語を《存在物》とする文として、先に(19a)の例を見た。

- (19a) He piled the books.
 動作主 存在物
 cf. He piled the books on the shelf. (= (19b))
 動作主 存在物 場所

(19a)は、位置変化使役文(19b)において《場所》が明示されなくなった特別な文であった。

主語を《動作主》、目的語を《存在物》とするタイプとしては、前節で見た(36)と(37)も該当する。(36)では《場所》を主語が、(37)では《場所》を動詞

《場所》、《存在物》という三つのマクロな主題役によって抽象化、一般化できる意味の世界を仮定すると、位置変化と状態変化を表す SVA と SVC の文型と、それに対応する位置変化使役と状態変化使役を表す SVOA と SVOC の文型が基本形であり、SVO の文型は、その基本形から派生した特別な文として捉えられることを論じた。

6. 一つの主題役から成る構文

本節では、一つの主題役だけから成る構文(5e)～(5g)を考察する。まず、《動作主》だけから成る(5e)には次のような文が該当する。

- (46) a. Brenda and Molly joked (with each other).
 b. Paul breathed deeply.
 c. Cynthia ate.
 d. Marlene dressed.

上の例はそれぞれ次のように書き換えることができる。

- (47) a. Brenda and Molly had a joke (with each other).
 b. Paul had a deep breath.
 c. Cynthia had a meal.
 d. Marlene put on her clothes.

この書き換え文では目的語が《存在物》を担う。言い換えると、(47)は(5d)のタイプと言えるから、(46)は、(5d)において目的語が担う《存在物》を動詞が含むようになった特別な場合と考えることができる。(46)では主語が《動作主》を担うと同時に《場所》も担っている。これは(5d)の例(36)と同様である。

(46)の文型はSVであるが、主題役に基づく意味の観点から見直すと、主語が《動作主》と《場所》という二つの主題役を兼担し、動詞が《存在物》を含むという、ひじょうに特別な文型であることがわかる。(46)の意味は、(47)の

書き換えが示唆する通り「位置変化使役」である。(46a)～(46c)では主語名詞句が表す人の口を經由して言葉、空気、食物が移動する。(46d)では主語名詞句が表す人の体に衣服が移動し到達する。

《動作主》だけから成る(5e)には、数は少ないが次のようなタイプもある。

- (48) a. They sheltered from the rain for a moment.
b. They camped overnight to see shooting stars.

上の例はそれぞれ次のように書き換えることができる。

- (49) a. They took shelter from the rain for a moment.
b. They had a camp overnight to see shooting stars.

この書き換えでは動詞の目的語が《場所》を担う。言い換えると、(49)は(5c)のタイプと言えるから、(48)は、(5c)において目的語が担う《場所》を動詞が担うようになった特別な場合と考えることができる。(48)の主語は《動作主》であると同時に、移動物すなわち《存在物》でもあるから、(5c)の例(34)と同様である。

(48)もSVの文型であるが、意味の観点から見るとひじょうに特別な文であることがわかる。¹³(48)も「位置変化使役」を表す。ただ、《存在物》すなわち移動物が《動作主》と同じであるから、自分自身に対する使役であり、結果として「位置変化」を表すと言える。

《動作主》を主語とするSVの文型には、稀に「行為」を表すものがある。

- (50) a. Birds fly.
b. I usually read in bed.

¹³ (48a)はSVAの文型とも取れる。from the rainが《場所》の半分(Source)を担っているからである。あとの半分(Goal)を動詞shelterが担っていることになる。

- c. I walk for an hour before breakfast.
- d. I can't drive.

上記の例のように、習慣化した行為や能力を表すという特別な文において行為の解釈が可能になる。

一つの主題役から成る二つ目のタイプとして、《場所》だけを含む(5f)がある。次の例を見よう。

- (51) a. The cat kittened.
- b. Jewels sparkled.

上の例は次のように書き換えることができる。

- (52) a. The cat had kittens.
- b. Jewels had sparkles.

この書き換えでは目的語が《存在物》を担う。従って、(51)では動詞が《存在物》を示し、主語はそれが生じる《場所》を担っていると言える。つまり(5f)のタイプは、(5bi)において動詞が《存在物》を担うようになった特別な場合と考えることができる。(51)もSVの文型であるが、(46)や(48)と同様、主語が二つの主題役を兼ね、動詞が残る一つを含むため、一つの項だけで済んでいる特殊な文である。(51)の意味は「位置変化」である。

《場所》を担う項だけから成る文には次のタイプもある。

- (53) a. His face reddened with embarrassment.
- b. The ice cube melted.

(53)は「状態変化」の意味である。変化した状態を動詞が示唆し、主語名詞句は、その変化した状態が生じた《場所》を担う。(53)もSVの文型であるが、動

詞が変化した状態としての《存在物》を兼ねる特別な文である。

一つだけの主題役をもつタイプの文の三つ目として、(5g)のタイプがある。(54)は主語が《存在物》を担い、その位置変化を表す。

- (54) a. A recreational fishing boat sank following a collision with a
coastguard vessel.
b. A persistent, cold rain was falling, mingled with snow.

主語の表す《存在物》が移動する場所は明示されていないが、動詞が示唆している。すなわち(54a)では海中または海底、(54b)では地面であることがわかる。したがって(5g)は、(5bii)において動詞が《場所》を担うようになった特別な場合と考えることができる。(54)もSVの文型であるが、位置変化つまり移動を表す文の特別な場合であることは明らかである。

最後に、主題役が一つもないタイプの文(5h)には次のような例が該当する。

- (55) a. It's raining cats and dogs.
b. It was snowing hard again.

上の例では主題役が一つもなく、《存在物》だけが動詞によって示唆されると言える。(55)もSVの文型であるが、これも位置変化を表す特別な場合と言える。

7. 結論

本稿では、学校英文法の基本と言える文型を、主題関係に基づいて一般化される意味の観点から見直した。

まず、《動作主》、《場所》、《存在物》という三つの主題役が揃った「位置変化使役」と「状態変化使役」を表すSVOAの文型を基本とし、Aの部分の範疇が変わってSVOCあるいはまれにSVOOの文型をとると考えることの妥当性を論じた。位置変化使役と状態変化使役の交替は、《存在物》を目的語と

するか、《場所》を目的語とするかによって起こるという考え方を確立できたと思われる。

次に、《動作主》がなく「使役」の意味が落ちた「位置変化」と「状態変化」を表す文について、SVAの文型を基本とし、Aの部分の範疇が変わってSVCあるいはまれにSVOの文型が派生するという分析を示した。位置変化と状態変化の交替は、《存在物》を主語とするか、《場所》を主語とするかによって起こり、これは、それぞれ対応する使役文の交代が《存在物》を目的語とするか、《場所》を目的語とするかによって起こることに対応することが明らかになった。

次に、SVOの文型の主題構造のパターンを分析し、位置変化を表す以外に、《動作主》を担う主語や動詞が他の主題役を兼ねるという、位置変化使役文または状態変化使役文の特別な場合があることを論じた。さらにSVの文型になると、主語や動詞が主題役を兼ねる割合がいっそう高くなった特別な構文であり、位置変化または状態変化、あるいは位置変化使役を表すと分析できる場合もあるが、行為を表すことは稀である。

以上の考察から、5文型のシステムでは射程に入らなかったSVAとSVOAの文型こそ基本的な構文であり、この型の文が表す位置変化・状態変化と位置変化使役・状態変化使役こそが意味の中核を成すことが明らかになったと思われる。また、他の文型も基本的な意味は位置変化・状態変化と位置変化使役・状態変化使役であり、SVAとSVOAの文型から派生した特別な型の文であることを示すことができたように思われる。

本稿で考察したような意味の観点から分析すると、英語の文で純粋に「行為」を表すと解釈できる文は少ない。主語名詞句が表すものの位置変化を伴わないような状況でも、位置変化を伴う状況にしてしまう手段さえ英語は有している。次のようなone's way構文がそうである (cf. 加賀 2007)。¹⁴

¹⁴ 同じ動詞 *joke* を用いた文でも (46a) は位置変化使役として分析した。これは発話をことばの移動使役と見なした結果である。他方、(56a, b) で問題になるのは、主語の表す人の体全体の位置変化の有無である。

- (56) a. *Sam joked into the meeting.
b. Sam joked his way into the meeting.
c. *Dorothy sang out of the room.
d. Dorothy sang her way out of the room.

(56a)と(56c)が容認されないのは、それぞれの動詞が表す行為を遂行しても主語自身の移動を含意しないからである。これに対して、それぞれ(56b)と(56d)のように *one's way* を加えると移動の意味が加わり、位置変化文として成立する。これも、英語の文が位置変化を基本としていることを示唆する現象と言えよう。

本稿で考察した主題役の組合せと構文のタイプを改めてまとめると、次のようになる。

(57) 主題役の組合せによる構文の分類のまとめ

	主題役	該当例	意味	文 型
a.	A V L T	6b, 7a, 8	状態変化使役	SVOA, SVOO, SVOC
	A V T L _	6a, 7b	位置変化使役	SVOA (TがSに移動)
b. i)	L V _ T	26a	状態変化	SVA (LがSに移動)
	ditto	25, 38	位置変化	SVO (ditto)
ii)	T V L _	26b	位置変化	SVA (TがSに移動)
	ditto	39	位置変化	SVO (ditto)
c.	A V L	34	位置変化使役	SVA
	ditto	20c, 35, 40, 41	状態変化使役	SVO
	ditto	42	位置変化使役	SVO
d.	A V T	19a, 36, 37, 44	位置変化使役	SVO
e.	A V	46, 48	位置変化使役	SV
	ditto	50	行為	SV
f.	L V _	51	位置変化	SV (LがSに移動)
	ditto	53	状態変化	SV (ditto)
g.	T V _	54	位置変化	SV (TがSに移動)
	T V T	45	位置変化	SVO
h.	Vのみ	55	位置変化	SV

A: Agent <動作主> : 行為者、使役者、原因

V: Verb 動詞

L: Location <場所> : 着点、起点、受益者、経験者等

T: Theme <存在物> : 移動物、存在物、出現物

S: Subject 主語 V: Verb 述語動詞 O: Object 目的語

A: Adjunct (Adverb) 必須の付加語 (副詞) C: Complement 補語

参考文献

- Aissen, Judith (1975) Presentational-*there* Insertion: A Cyclic Root Transformation, *CLS* 11, 1-14.
- Anderson, Stephen R. (1971) On the Role of Deep Structure in Semantic Interpretation, *Foundations of Language* 7, 387-396.
- 安藤貞雄 (2005) 『現代英文法講義』開拓社, 東京.
- Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Binding*, Foris, Dordrecht.
- Chomsky, Noam (1983) *Some Concepts and Consequences of the Theory of Government and Binding*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Chomsky, Noam (1986) *Knowledge of Language: Its Nature, Origin, and Use*, Praeger, New York.
- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Cooper, A. J. and Edward A. Sonnenschein (1889) *An English Grammar for Schools based on the principles and requirements of the Grammatical Society. Part II : Analysis and Syntax*, 2nd ed., Swan Sonnenschein, London.
- Coopmans, Peter (1989) Where Stylistic and Syntactic Processes Meet: Locative Inversion in English, *Language* 65, 728-751.
- 藤本滋之 (2009) 「主題関係に基づく結果構文の分析」『英語英文学論集』49, 107-131.
- 藤本滋之 (2015) 「主題階層、VP-shell、Split VP と諸構文の派生」『英語英文学論集』55, 13-39.
- Goldberg, Adele (1992) The Inherent Semantics of Argument Structure: The Case of the English Ditransitive Construction, *Cognitive Linguistics* 3, 37-74.
- Green, Georgia (1974) *Semantics and Syntactic Regularity*, Indiana University Press, Bloomington, Indiana.
- Grimshaw, Jane (1990) *Argument Structure*, The MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Gropen, Jess, Steven Pinker, Michelle Hollander, Richard Goldberg and Ronald Wilson (1989) The Learnability and Acquisition of the Dative Alternation in English, *Language* 65, 203-257.
- Gruber, Jeffrey S. (1965) *Studies in Lexical Relations*, Doctoral dissertation, MIT.
- Gruber, Jeffrey S. (1976) *Lexical Structures in Syntax and Semantics*, North-Holland, Amsterdam.
- 細江逸記 (1917) 『英文法汎論』文会堂, 東京.
- 池上嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学』大修館, 東京.
- Jackendoff, Ray S. (1972) *Semantic Interpretation in Generative Grammar*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Jackendoff, Ray S. (1990) *Semantic Structures*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- 加賀信広 (2001) 「意味役割と英語の構文」米山三明・加賀信広 『語の意味と意味役割』

- 第Ⅱ部, 研究社, 東京.
- Kaga, Nobuhiro (2007) *Thematic Structure: A Theory of Argument Linking and Comparative Syntax*, Kaitakusha, Tokyo.
- 加賀信広 (2007) 「結果構文と類型論パラメータ」『結果構文研究の新視点』ひつじ, 東京.
- 影山太郎・由本陽子 (1997) 『語形成と概念構造』研究社, 東京.
- 岸本秀樹 (2001) 「壁塗り構文」影山太郎編『日英対照 動詞の意味と構文』大修館, 東京.
- Levin, Beth (1983) *The English Verb Classes and Alternations*, University of Chicago Press, Chicago, Illinois.
- Milsark, Gary L. (1974) *Existential Sentences in English*, Doctoral dissertation, MIT. [Published by Garland, New York, 1979]
- 宮脇正孝 (2012) 「5文型の源流を辿る— C. T. Onions, *An Advanced English Syntax* (1904) を越えて—」『専修人文論集』90, 437-465.
- Oehrle, Richard (1976) *The Grammatical Status of the English Dative Alternation*, Doctoral dissertation, MIT.
- Onions, Charles T. (1904) *An Advanced English Syntax based on the principles and requirements of the Grammatical Society*, Swan Sonnenschein, London.
- Pinker, Steven (1989) *Learnability and Cognition: The Acquisition of Argument Structure*, The MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman, London.
- Rochemont, Michael S. and Peter W. Culicover (1990) *English Focus Constructions and the Theory of Grammar*, Cambridge University Press, Cambridge.
- 高見健一・久野暉 (2014) 『日本語構文の意味と機能を探る』くろしお, 東京.
- Travis, Lisa deMena (2010) *Inner Aspect: The Articulation of VP*, Springer, Dordrecht.
- van Valin, Robert, Jr. (1990) Semantic Parameters of Split Intransitivity, *Language* 66, 221-260.
- 綿貫陽・宮川幸久・須貝猛敏・高松尚弘 (2000) 『ロイヤル英文法』旺文社, 東京.

